『教育じほう』一九六〇年三月号（東京都新教育研究会）

勤労青年教育の諸問題

矢口　新

古くさい教育観

勤労青年教育といわれるものには、各種各様のものがある。文部省系統のものばかりでなく、農林省も行っているし、運輸省の息のかかっているものもある。種類をあげれば十指に余るが、それらがばらばらに行われているので、全体としてみれば必ずしも勤労青年教育が充実していることにならないし、能率があがっているわけでない。むしろ大きな穴があいているのである。文部省がそれらを統一的に管理するとよいなどといわれることもあるが、必ずしもそうでないように思われる。それ以前のもっと基本的なところに問題があるのではないだろうか。

勤労青年教育のさまざまな姿を見て感ずるのは、文部省系統のものたると、そうでないのとを問わず、そこにある種の古くささがただよっていることである。古臭いなどという言い方は決して学問的な言い方ではないが、そこには日本教育の体臭のようなものが感ぜられるのである。教育でも学校教育と異なって勤労青年教育というものになると、日本人の体臭がまる出しになるらしい。学校教育はお座敷着のようなものであるから、よそ行きの姿しか眺められないが、勤労青年教育にあらわれた日本人の教育観は、ざっくばらんにいって、相当時代遅れであるようだ。

ひとことに古臭いといっても、いろいろなあらわれ方をしている。たとえば定時制高等学校というのは勤労青年教育の機関としては、オーソドックスのものと一応は考えられている。しかし実際には、働いている青年のための教育をしているわけではない。昼間の学校を夜開いているだけであって、そのため働いている青年が通学しているけれども、かれらのために教育しようと考えているわけではない。働いている青年が何を勉強し、どう生きて行くのかを考えさせるような学習をやらせていない。どういう所に働き、何をする青少年たちだからなにを教育してやらねばならないなどということが本気になって考えられていないのである。昼間学校にかよう身分で、西も東もきまっていないものが勉強する全日制の方式を、ただ夜間に開いているというにすぎない。これが定時制高校教育の古臭さである。そんなことで働く青年を教育できるはずもないのに、平然として教育している。そしておかしいとも考えられないというのは、古い教育観に全く毒されているからである。

日本人の教育観は、教育というものは社会に出る前に準備として与えるものだということになっている。これは一般の学校教育を成立たせている考え方である。しかしこの考え方では、勤労青年教育を成立させる考え方は出て来ない。すでに社会に出て働いている青少年たちは教育しないでよいことになってしまう。日本人全体とすれば、そう考えている人のほうが多いであろう。

働く青少年を教育する根本は、準備教育としての現代の学校教育の考え方でなく、それと全く異なった原理に立つものであろう。働く青少年たちが、働く場所でよりよく生きる、よりよい生活者となり、よりよい生活の場をつくること、これが勉強しなくてはならない根本の理由である。しかも働く青少年たちは、毎日毎日生活において、それを考え、実行しなくてはならぬ立場に置かれているのである。よりよ

く生きようと自覚しない者はそのまま没落して行くであろうし、それは結果として社会の没落にもつながる。だから社会は、働く青年たちに、真の生活を自覚させ、毎日毎日の生活を反省し、それを科学的に整理し、真実の生活、真の技術へ近づく道を与えようとする教育を行なうのである。

ここから勤労青年教育の体制や内容方法がみな生み出されてこなくてはならない。その方式は、徒来の準備教育方式とは全く異なったものとなることは必然であろう。このことが自覚されない、勤労青年教育などというものは似て非なるものというべきであろう。定時制高等学校の古臭さというのはそういうところにあるといえよう。

日本人の教育観の古さは、勤労青年教育を成立せしめないばかりでなく、実は一般の学校教育も危機に瀕せしめている。最近の学校教育が入学試験の準備教育に忙殺されて、本来の教育を忘れつつあるのなどもその根底は古くさい教育観にあるのである。教育を受けることがただ学校卒業の免状をもらうことにあったり、就職試験の準備をしたりすることにあるのは、教育が生活の真実の道を与えることを忘れたからである。そういうところでは、科学技術教育とか道徳教育とかを叫ぼうとも、身につくはずがない。日本人一般の学校に入る目的は、そういう人生において真実のものを身につけようということにあるのでなく、試験の答案が書けることにあるからである。だからこのままの状態が続けば、日本の教育は破滅するであろうし、日本の社会が破滅することになろう。勤労青年教育を本格的に成立させることは、その意味では日本教育の救済の道を確立することになるであろう。

生　活　と　教　育

青年学級は、定時制高校の欠陥を補って青年の生活に即した教育をする機関であるかのごとくにいわれている。しかし青年学級関係のあらゆる努力にもかかわらず、それは日本における最もあしき教育機関である。それは第一に農村の青年のものでしかない。都会の中で働く青少年にはほとんど役割を果していない。がそれは一歩をゆずっても、農村の青少年たちは施設や設備のない所で、教材のない所で、すべてが借りものの中で一体何を勉強するというのであろうか。自学自習も共同学習も結構であるが、砂漠の中で勉強をさせるに等しい青年学級教育は、はたして教育といえるであろうか。社会教育というものはそういうものだというような言いわけは成り立つまい。一体こういう勤労青年教育を平然として十年間も存在せしめる根本の理由はなんであろうか。

目を広くしてみると、青年学級よりはるかに農村の青年の具体的な生活に結びついている、四Ｈクラブや農村青年建設班の教育がある。ともに農林省系統の指導に属しているが、おそらくそこに勤労青年教育らしさが出てきた原因があるのであろう。四Ｈクラブでは具体的には技術改良と結びついているものであり、建設班教育も農封建設運動と結びついている。それがこれらの教育活動を生活的につくりあげているエネルギーなのであろう。もちろん教育の技術や方法にしろうと的なものがあるけれども、そのようなことは今後いくらも改造できる。

ところが青年学級には、そういうエネルギーが出てこない。それは教育が勤労青年の生活の中へ入れないからである。四Ｈクラブのやるように思い切って、生活の問題自体を取り上げて、生活と同化しないからである。そこから一歩後退して教育を考えるからである。生活の中へ入らないからである。これは本質的に学校教育の形にとらわれているということである。小学校や中学校の校舎を借りて、小学校や中学校の先生を借りてというような考え方自体が、新しい勤労青年教育を成立させないもとである。そういうものが存在しているのはただ惰性にすぎない。いな、実は勤労青年教育として存在しているのではな

い。実体は青年のクラブのごときものとなっているのである。ごく小数のものは特殊な努力によって勤労青年教育として成立しているが、それは例外であって、大部分は堕落している。だから別な言い方をすれば、青年学級というのは、あるものは勤労青年教育機関に発達し、あるものはそうでないものに堕落して分化してしまっている。そのような事実がみえないのは、古い形式的な教育観が妨げているのである。

四Ｈクラブや建設班の教育は一歩生活の中へ踏み込んで教育の展開をしようとしているけれども、それも今のところはただ一歩踏み込んだというだけであって、本格的に農村生活者たる青年の教育をつくりあげているわけではない。ただ作物のプロジェクトをやり、みんなで話し合うということだけではきわめて一面的でしかない。四Ｈではなくて一Ｈだなどといわれるが、確かにそのとおりである。これが勤労青年教育としての形を整えるには、相当の努力が必要であろう。建設班の教育もまた同様である。

そこには、生活と教育の問題について真剣な突っ込みが必要なのである。古くさい教育では生活に関する知識が与えられるのが教育であったが、生活に入っている青年は、生活していく過程で、科学と技術によって生活を処理しなくてはならない。科学とは自然科学ばかりでなく、社会科学ももちろん含めなくてはならない。技術もまた単に自然科学的な技術でなく、社会科学を背景にした科学的生活技術を含めて考えなくてはならない。生活しつつあるものがそういうものを身につけていく方式の一つとして四Ｈクラブのプロジェクトも生み出されたが、それはただ一つの例にすぎないのが現実の姿である。そのような方式、あるいはまた別の異なった方式が生活の全面に対して考案されていかなくてはならないのである。

勤労青年の教育というのは簡単に成立するのでなく、このような根底から築きあげなくてはならぬ問題をもっている。しかしそれも勤労青年教育というものをはっきり独自のものとして自覚することがなくては成立しない。学校教育のそえ物という考え方では到底そういうことはできない。生活の技術や科学の教育を生活の中で行なう方式の研究などということは大変なことであるが、今のところそういう考え方や実践のもとになる勤労青年教育観というものができていないのが現状なのである。そこでもう一度古くさい教育観の恐ろしい弊害を痛感させられるのである。

職能と教育

農村生活者に対する教育はそれでもまだましなほうだといえるのである。都会で働いている青少年の中にそういう教育の機会から全然除外されている。勤労青年教育の機関として看板をかかげている定時制高校や青年学級が、そういう青少年を放置して平然としているのは考えてみるとおかしなことだが、それで常識としては通用するのが現在の日本である。そこにはやはり古くさい教育観があるからであるが、しかしもう少し具体的に考えてみよう。

都会で最も放置されているのは、主としていわゆる中・小企業の中に働く青少年たちであろう。これらの青少年たちは、定時制や青年学級方式ではつかまえられないのである。それは、かれらを入れておく社会が、かれらを教育するという考え方をもたないからである。昔、俗にいわれたことで、職人に教育はいらないということばがあったが、今の世の中でもそれ式の考え方はあるのである。

しかしこれにはもう少し分析を加える必要がある。事実社会の人々のいうように、青少年に教育はいらないという面もあるのである。それは学校に入って受ける教育というように考えてみると一層はっきりするのである。今の教育は確かにそういう能率の悪さや無意味さをもっているのでないか。学校を卒業した人々が、学校時代のことをど

れぐらい役立てているか考えてみるとよい。私自身八〇パーセントくらいは役に立たないように感じている。

だから毎日の生活に役立つ教育、そして、それが科学的背景をもっている教育を考えることは非常に必要なことである。それは生活の中に入りこんで教育をつくりあげる努力をすることになる。現在産業の要請からそういったものが次第に生まれつつあることは人々のしるとおりである。

技術者養成所や職業訓練所などは、そういう方向のものであろう。それは職場別に技術とむすびついて成立しつつある。これらの教育の現在立っている地盤は、産業がもっている技術伝承の伝統である。そういうものへもっと深く入らなければ、勤労青年教育というものは具体的には成立しないであろう。現在はまだごく一部のところでしかそういうものが成立していないが、本来考えてみると、そういう意味での技術の伝承や生活内容の伝承は、あらゆる生活者にあるのである。店員でも小僧でもそれの教育は実際に受けているのである。町工場の徒弟でもそういう伝承的教育は受けているのである。ただそれが生活の中に埋もれて、見えなくなっており、それが故に能率が悪いのである。もしここに科学的なメスが入り、それが改造されていくような教育が行われるならば、ほかならぬそういう中・小企業の中に働く人間の素質を改善してやること、そういう意味の教育が行われてよいはずである。

都市における勤労青年教育はそういう意味を持っていると思う。その点からすると、今の定時制や青年学級では到底入り込めないということも明らかである。技術者養成所や職業訓練所のごとき方式をもう一度考え直してみる必要がありはしないか。職能、職場と結びついた教育の方式である。

都会で青年学級が発達しないのは、実にこういう点と青年学級の考え方とが余りにかけ離れているからである。つまり青年学級では物の役に立たないのである。定時制は都会で発達しているというけれども、それは、勤労青年ではないのである。学校へ行けないものの教育である。働く青少年を働くことを土台として教育しようということではないのである。定時制は本当は働きたくないのだが、しかたがないから働いている者の教育なのである。条件がよくなれば働くことをやめて学校へ行くことに専心するのである。教育というものが、働くことをいやがる者の地盤の上に立っているということを、もう一度深く反省してみなくてはならないのではないか。

これはなにも勤労青年教育ばかりの問題でなく、日本の学校教育全般の問題でもある。勤労と教育、職能と教育との関係を根本的に見直すべき時に来ているのである。勤労青年教育が真剣に考えられるならば、それはおそらく日本の教育の当面しているさまざまな問題を解決する突破口を開くことになるのではないか。その意味で、職能や職場と結びついた教育をもっともっと深く広く推し進めること、そういう面への努力は当面の急務である。東京の下町におけるさまざまな職場に働く青少年をどう教育編成するかということなどは、最大の教育課題なのである。そういうことがこれまでほとんど問題になっていないなどということは、勤労青年教育が本格的に問題になっていないということを明白に物語るのである。

（国立教育研究所　教育内容研究室長）